

極楽堂(曼荼羅堂)

極楽堂は元興寺を訪れた人が最初に目にする建物である。東向きの入り口と、6月から8月にかけて飾られる蓮の鉢植えの列は、浄土真宗の中心概念である「浄土」をイメージしている。浄土とは、阿弥陀如来が主宰する西方の極楽浄土のことである。浄土では、人々は阿弥陀堂の前の池に浮かぶ蓮の中に生まれかわり、そこで阿弥陀様の教えを直接受けることができると言われている。浄土に生まれれば、悟りへの道が保証される。何世紀にもわたって、浄土宗の信者たちは、極楽堂で智光の曼荼羅を見て、浄土への往生を祈願してきた。

極楽堂の配置と建築様式

有名な曼荼羅を見る前に、極楽堂の建物を外から見てみる価値がある。正方形のお堂は1244年に建てられたものである。入母屋造りで、屋根は寄棟屋根（中央の棟から4方向に傾斜している）であるという珍しい組み合わせである。極楽堂は、禅室とともに元は元興寺の大講堂の一部で、それを解体して別の建物を建てたものである。極楽堂の多くは、718年の遷都の際に奈良に持ち込まれた部材でできており、その一部は1300年以上前のものである。

堂内には、中央の台座に置かれた立像の中に、智光曼荼羅が納められている。その両脇には智光和尚と礼光和尚の像が安置されている。寺の寮が極楽堂（当時は極楽坊）に改築される前は、この中央部に智光と礼光が住んでいた。その後、極楽堂は彼らの部屋を中心に囲むように改修された。この空間では、阿弥陀如来に念仏を唱えながら、中央の須弥壇の周囲を歩くことができる。この修行により、正の功德（くどく）が得られ、浄土に生まれ変わる可能性が高くなると信じられている。

祈祷依頼の記録

ホール中央の柱の数カ所にアクリル板を貼り付けてられており、極楽堂よりも古い時代のメッセージが刻まれている。12世紀から13世紀にかけて浄土真宗が盛んになると、人々は元興寺の僧に念仏を依頼するようになった。この彫刻は、そのような依頼を受けた人々が、支払った金額、受けた役務、役務の対象などを記録したものである。壇上の柱には、全部で7つのメッセージが刻まれている。このようなメッセージは、過去を知る上で非常に貴重な情報源である。1171年のメッセージには、富裕層にしかできないような高価な100日間の祈祷を依頼したことが記されているが、100年後のメッセージには、もっと短くて安価な期間の祈祷を依頼したことが記されているのである。このことは、浄土真宗が広まるにつれ、庶民も念仏を申し込むようになったことを示している。極楽堂の参詣者も、僧侶に念仏を囑託するのではなく、自ら中央のひな壇の周りを時計回りに回って念仏を唱える人が多かった。

幕板の反対側、背面には14世紀から16世紀のものと思われる「智光曼荼羅図」の第二版が掲げられている。極楽堂は、浄土との結びつきが強いため、遺骨を納める場所としても好まれた。かつては内壁や長押に歴代の僧侶の碑が並んでいたが、現在は堂の奥にのみ残されている。